『おやすみ』

２００９年に発見された作者不詳の未完小説。短編の草稿と思われるが、『おやすみ』という表題の他は何もわからない。

見覚えのある字だった。いつもどおりクタクタになって仕事から帰ってきた玲子は、食卓の上に無造作に放り出されていた封筒の宛名書きを目にして思った。それは女の手だった。

夫の帰りは早い。玲子が帰宅する深夜近くには、もう食事も風呂も済ませて自分の部屋で好きなことをしているか、寝室でさっさと休んでいることが多かった。大阪市立大学で非常勤の事務員をしている玲子は、たいていは一人で遅い夕食をとる。特に年度末は新しい教育課程の資料作りなどで忙しく、時として玲子が説明会で四十人くらいの教員を相手に二時間ほど話をしなければならなかったりと要求される仕事の量も質も半端ではない。仕事の持ち帰りも日常で、法定労働時間など存在しないに等しかった。玲子は四十六歳で法学部に勤めていた。こんな違法な労働条件を平気で押し付けておいて、何が法学部だと最初の頃は憤りを覚えてみたが、だんだん諦念とも違う、何もかもがどうでもいい心境に玲子がなりつつあった。

玲子が大阪市立大学に勤めていると知って、同世代の女友だちはいい仕事ねと羨望の目で見てくれる。「私たちの歳になると、もうお掃除くらいしかないのよ」と言われて、清掃業のきつさと低賃金には玲子も後

ずさりするが、大阪市立大学に限らず凡そ大学という場所が知性とは無縁であることをどう説明しようか苦笑してしまう。教員たちからしてそうだ。彼らは一体どんな環境で育ってきたのか。この世間には玲子のような人間が窺い知れない階層が存在しているのである。

学会が大阪市立大学で開催されたとき、参加者を乗せた市バスに玲子もかち合ってしまった。バスが大学前に着いて降りようとすると、呆れることに満員の乗客たちの殆どが老いも若きも一斉に両替機に千円札を入れ始めたのだ。中には一万円札を運転手に示して、釣りを寄越せと言うのまでいた。あらかじめ小銭を確かめておくとか前もって両替しておくとかいった常識は、大学教員であることに不要らしい。

さすがに運転手はムッとした顔をしていたが、これまでの公務員叩きで、さんざん市バス運転手の素行が槍玉に挙げられてきた経緯もあってか何も言わなかった。昔の運転手なら「お客さんバスの乗り方を知らないのか」ぐらいは平気で言ったろう。玲子を含む少数の常識的な乗客は、この集団の両替劇が終わるまでずっとバスの中で待たされ続けていた。

大阪市立大学を地元の人は「イチリツダイガク」と呼び慣わし「イチダイ」が通称だが、可笑しなことに大学の教職員たちは頑なに「シリツダイガク」と読んで「シダイ」と略している。

どっちも間違ってる、インチキ大学が本当じゃないの、と玲子は思った。それは労働時間のことだけではない。ここで職員というのは正規労働者で公務員（正しくは「みなし公務員」とか言うらしい）であるが、事務員の三分の二は玲子のような非常勤か派遣、あるいは下請け労働者たちだった。パートさん、派遣さん、業者さんとそれぞれ侮蔑的な名前を職員から頂戴していて、法律上の地位は微妙に異なっていても、非正

規労働者として一括りにされて黒を白と言われても職員には服従を義務づけられている点で立場は共通していた。

そして、非正規労働者たちは職員の倍以上の仕事量を抱えていることでも共通していた。職員たちの傲慢さは、年々増え続ける非常勤の教員に対しても似たところがあった。使い捨ての非常勤講師など、終身雇用の事務職員の目には屁でもない存在であった。大学図書館への購入希望図書があっても、職員たちはいとも簡単に「非常勤講師の言うことなんか聞いてたらきりがない」と没にしていた。とにかく職員と呼ばれる連中は、身分制度の上位にいるのである。

先月、職員の横柄な態度に堪忍袋の緒を切った下請け労働者がいて、玲子のいる事務室がほんの一瞬騒然となった。偉そうに言うな、何様のつもりだと激昂する下請け労働者の剣幕に、島崎弘子という狸そっくりの五十女の職員は涙を浮かべてうろたえていた。下僕の予期せぬ叛乱に常は傲慢な狸女が怯えているのは玲子にとって痛快な見世物だったが、報復は翌日に来た。

下請け会社の営業が大学に謝罪に訪れて、件の労働者の身の程知らずの非行を侘びたのだ。課長席での会話から「あれは懲戒解雇しましたので」という柴田の下卑た声が玲子にも聞こえていた。

その営業は柴田と言った。これまでもよく伺候している男だ。三十半ばの短髪でいかつい体育会系の雛形のような、およそ複雑で屈折した思考などとは縁のない柴田の顔が事務室に現れるたびに、玲子は大阪市立大学の知性の程度が露呈しているのを感じて内心で笑っていた。

首になった労働者は、噂では労働基準監督署に大阪市立大学と下請け会社の法令違反を申告したり弁護士会に人権救済を申し立てたりしてい

るらしいが、結論は決まっている。そんな抵抗が通るようなら、そもそもはなからこんな世の中にはなっていないのだと玲子は思った。労働基準監督官も退職後は下請け会社に再雇用の世話になるのだろうし、弁護士会の各委員会にはちゃんと大阪市立大学卒業の弁護士がいて母校愛を発揮するだろう。おまけに島崎が大阪市立大学労組の活動家で、しかも大阪市立大学労組では日本共産党がそれなりの影響力を持っているという現実も玲子の観測を補強していた。

かつて玲子と同じ非常勤の女性がこの労組に非正規労働者の実情を相談に行ったところ、出てきた専従役員が「職員の労働条件を守るのが労組の役目で非常勤や下請けさんのことは知らない」と無頓着に言い放ったのを聞かされていた。女性はすぐに退職していった。日本共産党が無産者の党ではないことは確かだった。

事件に対して、他の非正規労働者たちは冷ややかな目で無関心を装ってはわが身の無事を確認している。むしろ、あわよくばこの機会に自分は馘首された労働者みたいな非行を働かないことを大学や派遣会社、下請け会社に売り込んで、少しでも優遇を得ようとする輩が少なからず存在していた。無関心を装う連中も沈黙によって大学や会社に媚びを売っているのだから、結局は非正規労働者の大多数が飼い主に尾っぽを振る犬なのだ。玲子はそんな連中を唾棄する矜持は失っていなかったが、自ら竹槍を研ぐまでの純情さも持っていなかった。何もかもがどうでもいい、という感じになのだ。

下僕の叛乱に覚えた恐怖から島崎はすぐに立ち直り、非正規労働者に向かっていつもの暴君ぶりをほしいままにし始めていた。玲子は虐げられる民である。「私語が多すぎますよ」の一言には、耳を疑った。そう

言う島崎こそ、一日中べらべらと口を動かしていたからだ。今朝は三省堂書店の大阪市立大学担当者が京都に転勤になる挨拶に来たが、仕事をしている玲子の傍らで島崎は祇園祭の話題に御執心だった。騒音のような雑談が止まることなく続き、やっとお開きになったのは小一時間後である。その島崎が、午後に玲子の私語を咎めたのだ。原因は皮肉にも柴田である。この下請け会社の営業は、来るたびに爬虫類の目で玲子を舐めまわすのだが、今日は知りもしないくせに玲子の仕事ぶりを褒めて「うちの会社に欲しいなあ」とお世辞にもならないお世辞を使った。パートさんから業者さんへと呼び名が変わることを悦ぶとでも思ったのか。玲子は笑顔を作って社交辞令を返したが、爬虫類は「今度昼飯でもどうですか」と畳みかけてきた。冗談じゃないと吐き捨てたはずの言葉が、作り笑顔のままの重ねての社交辞令になった。島崎はこれを聞いていたのだ。

狸女に性的関心を寄せる男は、大阪市立大学にいなかった。何処にもいなかったと言うべきだろう。なのに何で玲子には、が島崎の苛立ちだった。玲子には思春期に容貌をからかわれて傷ついた過去がある。島崎の知るところではないが、美人でもない玲子に柴田が欲望を露わにしているのが島崎には妬ましかった。

二十代の非常勤職員には負けても仕方がない。何で四十女の玲子にまで私は負けるのか。柴田が透かして見ようとした玲子の衣服の下の肉体を、島崎は思い切り暴いてやりたい激情に支配されていた。あんたの持ち物も、いい加減古びてるんじゃないのかい。それが私語を咎める言葉になり、仕事の進捗具合を罵る言葉になった。玲子は何処までも作り笑顔のままで島崎に応じたが、繊細な心が壊れそうになるのを必死に耐え

ていた。玲子の心が硝子のこどく繊細であるのを、玲子は必死に隠して生きていた。

食卓に着いた玲子は、一日の嫌な出来事を振り払おうとしていた。そこに置いてあった郵便物は、夫が選り分けて必要なものを抜いた残りである。広告や請求書の類に雑じって顔を覗かせているのは、懐かしい女友達からの気まぐれな手紙かもしれない。だとしたら束の間の物思いにふけることができそうだ。

夫は、もう私には興味がないと玲子は思っていた。夫婦生活などという如何にも義務的で、男女の妖しい光景とは程遠い響きの行為はまだ夫との間にある。それは夫が欲求を覚えたときに、手近に玲子しかいなければ取りあえず玲子を道具の代わりに使うのに似ていた。夫が満足するための行為であり、玲子はただその相手をさせられているに過ぎなかった。どんなに玲子の健康な女の部分が、驚くほどの渇望を快感に対して抱いていても、それはごくごくたまに夫の満足までの時間が長いときに辛うじてわずかに届くだけで、ほとんどの場合が玲子は置き去りにされていた。

振り返れば、これは結婚した頃から変わらないことかもしれない。新婚の妻の若い肉体への興味から、夫は執拗に繰り返し求めはしたが玲子が悦ぶように可愛がってくれるということはなかった。今、その回数が減ったのは、文字どおり玲子の肉体への興味が失せたからだろう。つき合っている女性がいるのか、それとも風俗へ足を運んでいるのか、それとも猥褻動画で自慰をしているのか。もしかしたら、男性の更年期なのか。その何れにしたところで、もう夫は私には興味がないのだと玲子は

思っていた。

その興味のないはずの夫が、郵便物に反応したことがある。半年前のことだった。帰宅した玲子を、夫が不機嫌そうに食卓で待ちうけていたのだ。「遅かったな」「いつもの時間よ」「手紙来てるぞ」

夫の手には、一通の封筒があった。写真在中と書かれた玲子宛てのものだった。夫の不機嫌は、これが原因なのかと玲子は思った。一体、誰からの手紙なのか。「佐多って男、知ってるか」

それだけ言うと、夫は手紙を玲子に渡して二階に上がって行った。佐多、と玲子は首をかしげた。あの佐多さんかしら。そう思って封筒を裏返すと、たしかに以前の職場で同僚だった佐多だった。中からは万年筆で書かれた宛名と同じ拙い字の並んだ原稿用紙が三枚、それに写真が一枚出てきた。わざわざ白紙の原稿用紙を一枚添えているのが年齢を感じさせて可笑しかったが、玲子と佐多は十も違わない。

写真は、裸婦の素描だった。美術展のみやげ物ではなく、佐多が描いたものを写真に撮っていた。下手な絵だったが、小さな印画紙に収まった豊満な乳房と肉づきのいい肢体、そして恥毛の翳りに玲子は何故か羞恥を覚えてしまった。

夫の不機嫌は、男の勘だったのだ。いくら興味がなくなっていても、自分の妻に親しげに手紙を寄越す男は許せない。そんな夫の身勝手に玲子は腹を立てていた。と同時に、どうせならこの佐多が送ってきた裸婦を夫に見せつけてやりたい衝動にも駆られた。そんなに中身が知りたかったら、夫が自分で封を切って確かめたらよかったではないかと。しかし、現実の玲子は貞淑の檻から決して抜け出したことのない女であったから、そんな舞台を与えられても女優のような台詞は出て来ないことを

誰よりも知っている。

玲子の気持ちの高ぶりとは無関係に、佐多の手紙はつまらないものだった。休日に大川べりを歩いたこと、早春の息吹に心なごんだこと、そんな程度のことが短い文面に書き連ねられていた。社交辞令と言うにも余りに無内容で、さりとて詩的な香りがするわけでもない。我流で裸婦の素描を始めた、というのが末尾に一言添えられていて、もしかしたら誰彼なしにこんな手紙を送りつけては悦に入っているのかもしれない。そんな気がしてきた。

ふと、玲子は写真の裸婦に羞恥を覚えた自分が滑稽に感じられた。佐多とはただの同僚でしかなかったし、前の職場を辞めてから十年になるが、その間も年賀状のやり取りをするぐらいだった。第一、佐多のことが玲子の記憶にそれほど残っていないのだ。何処となく近寄りがたい雰囲気がして、職場で男どもがよくやるような下劣な猥談こそしなかったが、知的かと問えば風采の上がらないと答えた方がよさそうな、とにかく異性として惹きつけられるものを特に持たないのが佐多だった。

だから、日頃の夫への不満に対する小さな爆発のように、佐多の手紙に何かを期待してしまったわが身が玲子には急に淋しく感じられた。夫が不機嫌を疑惑の域まで進めて手紙の封を切ってしまわなかったのは、佐多という未知の男が魅力に乏しいことを嗅ぎ取ったからではなく、むしろ妻に男などいるはずがないという侮蔑を玲子に加えて得た結果ではなかったのか。内面にどす黒いわだかまりが渦を巻き始めていた。体中の仕事の疲労が、全身を圧しつぶそうとしていた。玲子は、食器洗いや洗濯はおろか風呂に入る気力も無くなりそうだった。

玲子は、もう一度写真に目をやった。裸婦は左手で長い髪をかきあげ

て、やや足を開いて斜めに座っていた。佐多という男を記憶から取り出してみて、そこに何のときめきもないことを確かめたばかりなのに、それでもこれを夫に見せてやりたい衝動が襲ってくるのを玲子は止められなかった。勘繰って邪推したらいい。こんなものを送ってくる男は誰だ、おまえには男がいるのか。そう私を問い詰めなさい。疲労の中で何かが再び爆発しようとしていた。そして、不思議な羞恥も蘇った。まるで玲子が佐多の前で全裸になったかのような羞恥が。

玲子は高校を卒業して少し勤めた後に夫と見合い結婚し、すぐに家庭に入った。夫以外の男は知らなかった。これは今でも変わっていない。よくある女同士の席で男の数の話になったとき、玲子の夫だけという答えに「真面目なのね」と驚きとも揶揄とも取れる言葉が返ってくるが、機会がなかっただけのことである。三人、四人というのが平均的な答えらしかったから、適当にそれに合わせてもよかったのだが、玲子はいつも正直に答えていた。

玲子が競馬友と呼んでいるいちばん気の合う女友達は、数え切れないくらいの男と体を重ねていた。両親の過干渉への抵抗から、初対面の男と挨拶がわりに寝るようなことを平気でしていた彼女だったが、今は妻として母として幸せに暮らしている。玲子は、その真面目な人柄が好きだったし、彼女の今の幸せがうらやましくもあった。いろいろな男を見てきた目が、今の幸せをつかんだのではないかとも思えた。

結婚して間もなく、玲子は母になった。長男に続いて二男も生まれた。だがささやかな幸福は上辺だけで、夫の両親との同居は特に姑との確執で鬱々とすることが多かった。姑は、わが子可愛さにあらゆることで玲

子に理不尽な言い掛かりをつけたのだ。それは完全に言葉の暴力であった。孫の育児に口実を借りたとしても、実は息子を玲子に奪われまいとする姑の異常な偏愛であった。玲子は、人知れず涙で顔を濡らして耐えていた。それしか術が無かったのだが。

子どもたちへの愛情は誰よりも強く持ちながらも、牢獄のような生活を強いられていた玲子に、意外なところから小さな転機が訪れた。高校時代の同級生が、競馬場のアルバイトに誘ってくれたのだ。下の子は幼稚園に上がっていた。仕事に出たいと言った玲子に姑は剣のある言葉を浴びせたが、ほぼ一ヶ月おきの競馬の開催に合わせた土日の発売係だと知って本心では行かせたがっているのが読み取れた。玲子がいない週末は、息子を独占できるという歪んだ欲求が姑には優先したのだ。夫は中級職の公務員で、土日はいつも家にいた。

仕事に出たからといって、その日の家事から解放されることはなかったが、玲子にとっては姑と同じ屋根の下にいることを免れただけでも楽しかった。女性アルバイトばかりの職場だった。第十レースは、とおレース。第九レースは、ここのつレース、と言った符牒も耳新しくて面白かった。当時は窓口で客が言ったとおりに耳で聞いて発券するやり方だったから、とんでもない客も現れた。最終レースが終わった後で、第九レースを買ったのに馬券が第十レースになっていると言ってくるのだ。体臭を通り越して糞尿の臭気をまとって窓口に来る客には、香水を含ませたハンカチを片手に持って時おりそれを鼻に当てながら応対することも教えられた。アルバイト仲間たちは「ここで勤まったら何処へでも行けるよ」と自嘲とも快活とも取れる笑いをしていた。玲子は、家を離れてそんな彼女らと時間を共有できるのが、何よりもうれしかった。

数え切れないくらい男を知っていると言った女友達とも、玲子はここで一緒になった。だから競馬友である。

佐多の手紙という闖入者に、一日の生活の歯車を狂わされた思いがして玲子は不快感から抜け出せないでいた。何とか家事を片づけて、やっとのことで浴槽に身を横たえたのは午前二時だった。不快感は何よりも夫に対して向くべきなのだが、玲子には佐多のことが引っ掛かってならなかった。佐多の記憶をたぐろうとして、玲子は結婚後に初めてアルバイトに出た頃のことを思い出していたのだ。佐多と出会うのは、その次の次の職場である。

玲子は四十代の後半に差しかかろうとする自分の肉体が、嫌がうえにも衰えてきたのを改めて感じていた。湯の中でも乳房の垂れ下がった様が隠せない。佐多の描いた裸婦は何歳ぐらいなのか。乳房も張りつめて上を向いていたような気がする。若い女たちが無意識に示す、老い行く者への残酷さすらそこに読み取ろうとするのは玲子のこの心理状態ゆえなのだろうか。我流の拙劣な素描に、そんな深みが籠められているなどとは馬鹿馬鹿しい。それにモデル女を全裸にして眺めまわし、それを描くなどという行為がまかり通っていることも玲子には奇妙に思えてきた。

思春期に読んだマーク・トウェインの随筆に、ここで私が女性を裸にして立たせて、それを鑑賞する様子を文章にしたら誰もが私を非難するだろう。ところが画家はこれをするのだ。そして、みんなそれを賞賛するのだ、と皮肉って書かれていたのが玲子の印象に残っていた。トウェインの感覚が常識ではないのか。男と女とでは性的欲求のあり方が違うかもしれないということは理解しているし、人間の理性に対する負の部

分、あるいは秘めたる部分の発散として性産業があるのは理解できても、芸術という真善美の具現の場にどうして全裸の女が必要なのだろうか。

佐多の裸婦は性器までは見せていなかったが、中島千波という日本画の巨匠は「股に凝る」と宣言して、裸婦を開脚させて性器だけを描いているのを芸術関係の雑誌で目にしたことがある。一人ひとり形も色も違って、花が咲いたようで美しい。もうモデル女の顔などどうでもいい。性器だけが見たいという中島を職業モデルたちは敬遠しはじめたが、代わって描いてほしいという素人女たちが殺到してきたと中島は得意げに語っていた。

競馬友の彼女はかつて水商売をしながら、客の男たちと片っ端から一夜だけの歓を尽くしていたのだが、芸術の名の下でただただ性的な関心を満たしている中島と、同じく美術モデルを称して崇高な行為であるかの如く裸をさらしている女たちよりも、水商売の競馬友とその肉体を貪った男たちの方がはるかに人間として純粋なのではないか。湯船で玲子の思考はあてもなく彷徨していた。

玲子は、自分の顔に対する劣等感を

※ここで原稿は途切れている。